Y16c　アストロノミー・パブの実施とその評価　－ 科学を文化として楽しめる国を目指して－

○縣　秀彦 (国立天文台)、小野智子（国立天文台）、大朝摂子（三鷹ネットワーク大学）、森田洋平（高エネルギー加速器研究機構、横山広美（総研大）、平田光司（総研大）

英国で盛んなサイエンス・カフェが日本でも行われるようになってきた。欧州での科学普及におけるキーワードが「対話」であるのに対し、日本のそれは「楽しみ」と「説明責任」である。このため、単なる借り物のカフェ形式では講演会と何ら変わることがなく、研究者と市民の間での双方向コミュニケーションが厳密な意味で成立するとは考えにくい。そこで、筆者等は日本の文化に適応した科学コミュニケーション方法を考案した。

国立天文台と三鷹ネットワーク大学は、研究者と市民との双方向コミュニケーションを通じ、研究者の社会リテラシーの向上と、市民の科学リテラシーの形成・向上を目指して、2005 年 11 月より月１回の「アストロノミー・パブ」を実施している。アストロノミー・パブの特徴は、１．人数を絞る (30 名以内)、２．アルコールが入る (会話が円滑になる) ３．最初にステージで対談（対決）をする (これによってフロアの人がどちらかに感情移入したり、自分の代弁者のように感じる)、４．30 分の対談のあとは、フロアに降りて参加者と会話する。５．気の利いた料理と飲み物を提供する。６．駅から徒歩１分。　といった点である。このような活動を通じて、天文学が市民の知的好奇心を刺激し、科学への興味のエントランスとなることを願っている。

本発表では、11 月～3 月の 5 回分のアンケートデータに基づき、この活動の成果や課題について評価を試みる。多くの機関・大学・市民の間で同様の試みが始まり、科学が文化として定着することに寄与することを希望している。